
大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区北白川追分町 京都大学教理解析研究所図書室 (提登宛先付)

TEL 075-753-7223

第14回支部総会記録

1991年10月19日(土) 午後2時より同志社大学クローバハウスで支部総会がひらかれました。大図研常任委員会からメッセージを受け、事務局長より支部活動の総括と方針について報告がありました。特に今年の方針は現場の実践を重視し、現場を基礎にいかん活動していくかが強調されました。政策骨子を参考にしながら、現場を総合的に見直し実践していく。そして、それらの実践をわかりやすくまとめて支部報、大学の図書館等に報告したり、交流会を開いたり、研究団体ではあるけれども、現場に役に立つ大図研活動をめざして、どうゆう工夫をしていくか等が話あわれました。

(京大教育) 教員が研究というよりも教育実践にもとづいて活動するように、図書館員も現場をもっている最大の強みを生かして、それを全面に出す必要がある。大図研の人は自分の現場でもっと仕事をやる事。それも自分だけがやるのではなく、いっしょにやる人を増やしていく事が大事だと思う。

(立命館大学) 大学間で実践を交流する事が大切だ。そして、実践を報告することによって活動が見えてくるのではないか。

(京大教養) 他の職種からブラリブラリアンだと言われる。他大学の人と実践を交流出来ると刺激になっていい。

(京大理) 理工系は仕事の中身について、日常業務の中だけでは充分こなせない。図書館員として役に立っているのかというも疑問をもつ事がある。しかし、大図研大学で科学史を勉強して、むつかしかったが、全体の流れがつかめ仕事の励みになった。

(京都橘女子大) 現場実践の重視はわかりやすいし、非常に良いと思うが、自分の現場をみると問題が多い。なんとか進んでいるところの経験を学んで、それに近づきたい。今年

の大図研大学でレファレンスがあるのは現場で非常に役に立つと思うので期待している。
(同志社大学) 同志社ではカウンター業務が新人やアルバイトで行われていて、レファレンスの第一歩ですら不十分になってきている。機械化が進んで、だれでも出来るという事に流されているようだ。

(京大教養) 教養部は解体されて、1992年10月から総合人間学部に変わり、1993年4月1日から学生が入ってくる。図書館も今後の在り方を考えなければならない。カウンター業務について一言述べたい。図書館員自身がカウンターを本当に重要視しているのかどうか。教養の図書館ではカウンター当番の人が週刊誌を読んでいる。NACSIS-I-ILL システムが導入されようとしているが、図書館員にGive and Take の考えがない人がある。

(京大附図) 現場実践の方針はすごく良い。図書館は実践が第一であって、現場で利用者がどれだけ満足するかが大切だ。ただ、日常業務においまわれ、家に仕事を持って帰る事もあり、勉強できない。勉強時間は人を増やしてもらわないと解決できないのでは。

(京大文) 書庫の本を動かすのが年中行事になっている。梱包してしまって利用出来ない状態に疑問を持ちながら作業している。端末も入っているが、特殊文字もあって、旧態依然として、仕事は煩雑になっている。仕事の見直しについての話がなかなか出来ない。大図研で言われている事と現場のギャップを感じ悩んでいる。

(立命館大学) データベースを抱えているが、はたして良質のデータベースか疑問である。主題分析をしてキーワードを付け検索し易いような作業はできていない。図書館員が今何をなすべきか、きっちり整理しないといけない。他からみて図書館がどのような仕事をしているのか見えてない。図書館が外へ向かって訴えないといけないのではないか。

(同志社大学) データベースの話では、NACSIS-IRで2000件ほど検索したが、雑誌、逐刊物をみる限りでは、ひどいデータだ。逐刊物は雑誌と図書でも入力されているものがある。雑誌でもだぶって入力されている事もある。おそろべき実態だ。自らもデータの実態を知らなければならない。学情にも声をどしどし上げていかなければならないが、現場でひどい例にいきたったらエッセイでいいから書き出していかないとダメだ。

(京都橘女子大) こちらは、大規模大学とは違い、学情のデータベースの質の良し悪しはあるでしょうが、学生は端末で検索してデータがでてくれば、感激している。あれだけのデータベースがあれば御の字で、カード目録に比べれば納得のいく検索ができる。

(酒井) 働ながら勉強するという事は現実には直面して何とかなくてはという時だ。公務労働をやっている人が勉強するのは、どんな職種であれそういうのが出発だ。生の実験材料

がまともにある。研究者と違って時間の保証がされていないから、現場の実践とからめて、そこで勉強する。大図研はそれをサポートするところだと思う。勉強するのはあくまで本人だ。先程、ブラリブラリアンという話がありましたが、昔からで、なぜそうなのか。ブラリブラリアンと外からは見られるが、中は火の車である。仕事の質がちょっと違うように感じる。図書館以外の仕事は権力とか利害とかか結びついているが、図書館の仕事は研究という今までにないものを作りだしていくという事と結びついているし、期限というものがない。また、図書館に働く人達が大図研の会員をどう見ているのかも考えてほしい。人員の問題では、今こそ大胆に出していかなければならないと思う。カウンターの問題は、図書館業務の中でどう評価するのかか政策の別れ道だ。文部省はカウンターの評価をひどいものになっている。今こそ「図書館とは何か」を現場から考える時にきているところの頃思う。戦後の図書館の指導的な人々が亡くなっている状況のもとで、まともにものを考え、自主性をもった団体がなくなっている。大図研くらいしかないのではないか。

以上、時間の関係で討議はおわりましたが、引き続き、現場からどうゆうふう工夫をしていくのかを重視し、さらに研究を深めていく事が確認され、各議案を採択し、閉会しました。尚、新しい支部委員は次の人々が選出されました。

支部委員

篠原俊夫	京都大学医学図書館
堤 豪範	京都大学数理解析研究所図書室
竹本文夫	同志社大学人文科学研究so図書室
竹村 心	京都大学教育学部図書室
大館和郎	京都学園大学図書館
橋本展世	京都大学文学部図書室
西野真知子	京都大学教養部図書館
松原 修	立命館大学図書館
小林倫道	京都橘女子大学図書館

会計監査

今西貞子	京都大学文学部図書室
------	------------

大学図書館問題研究会京都支部御中

メッセージ

貴支部の第14回総会開催に当たり、メッセージをお送り致します。

1991年は湾岸戦争の勃発にはじまり、証券スキャンダル、ソ連の激変等めまぐるしい展開を見せています。より身近なところでは、大学審議会の一連の答申と大学設置基準の大綱化の施行によって、大学と大学図書館をとりまく行政施策にも大きな変化が見られます。

このような時に、本年度の全国大会では大図研22年間の蓄積を集約する大学図書館の政策骨子がまとめられ、議案書とともに全会員に提示されました。この内容は行政サイドが導入をすすめている大学評価制度に対して、現場の立場から図書館のサービスや業務を点検する際の有力な手掛かりとなるものです。

京都支部は本年度の全国大会でも、先進支部にふさわしい、この1年間の方針具体化案を提案され、大図研全体の発展を視野に入れた心強いエネルギーを発揮されました。

全国レベルでも、貴支部のすぐれた経験と提案から謙虚に学び、図問研・学図研との合同研究集会、オープン・カレッジ構想、綱領や分科会・主題別交流会のあり方などの見直しを計り、1000名の入図研を創出する追求をはじめています。

その点で貴支部の役割は今後とますます重要になるものと思われまますので、本総会では全国の支部の牽引者として充実した論議が展開され、実りある成果の得られることを願って、メッセージといたします。

1991年10月19日

大学図書館問題研究会常任委員会

大図研大学11

専門科目	英米法
講師	堀田 牧太郎(立命館大学国際関係学部教授)
日時	11月9日(土) 午後2時-5時 11月10日(日) 午前10時-午後4時
場所	立命館大学 末川記念館第3会議室